

卒業式式辞

柔らかな春の息吹の感じられる今日の佳き日、保護者の皆様のご臨席を賜り、令和2年度の卒業証書授与式を挙げていただけますことを、職員一同、大変喜ばしく思います。

ただいま卒業証書を授与いたしました171名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとう。

1年に及ぶ感染症との闘いと自粛生活。皆さんの高校生活最後の1年は、さまざまな活動もままならず、何が正解かを、もがき、模索し、それでも納得解を探りながら精いっぱい生活してきた年度になりました。皆さんが限られた環境の中でも精いっぱい努力し明るく元気にふるまう姿に私たち何度も救われ、本日このように立派に成長した姿の皆さんを前に、「明けない夜は決してない」と皆さんの未来を応援する気持ちでいっぱいです。保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠にありがとうございます。高校卒業という大きな節目を迎えた今日まで、たくさんの愛情を持ってご支援くださいましたことに心より感謝いたしお祝い申し上げます。

誰もが経験したことのない未知のウイルスとの共存生活は、私たちが当たり前とってきたものの大切さをあらためて感じさせ、「不要」とされていたものに、どれほど心豊かにさせてもらっていたかを認識するものでした。学校に通い学べる幸せと、学ぶという本質と意義を考える機会にもなりました。

福沢諭吉の「学問のすすめ」の12編に、ある書生の有名な話があります。書生は国を離れて長い間、江戸で勉強しました。偉い先生方の教えを聞いて、日夜怠らず書き写し取ったところ、数年間でそのノートは数百冊にもなったそうです。ついに学問を成すことができたので、書生は故郷に帰ることにしました。自分は東海道を下り、写し取ったノートはつづらに入れて船で送りました。しかし不幸なことに、その船は静岡沖のあたりで難破してしまい、自分は故郷に帰ったものの、学問はすべて海に流れてしまって、身についたものは何もなく、その書生の愚かさは勉強する前と何も変わらなかった という話です。福沢諭吉は「学問の要は、活用あるのみ。活用なき学問は無学に等し」と言い切り、この書生の話为例にあげています。諭吉は、ただ学ぶだけでは本当の学びとは言えない。学んだことをどのように活用するか、その意識が大切だと述べています。学問をする前と変わらなかった と評された書生には、学びの基本姿勢として「自分の頭でしっかり考え、どうすれば学んだことを、人のため、社会のために使うことができるか」という視点が欠けていたのではと考えます。卒業生の皆さんが船出するこれからの世の中は、意見の違う人や価値観の違う人たちと、違った意見を交わしながら、正解のない問いと対峙する時代です。須坂東高校での3年間で学習したこと、楽しかったこと、悩んだこと、辛かったこと、全ての経験が皆さんの「学んだこと」です。それをどう活用していくか。学びの本番はこれからです。主体的に考えながら、この先も学び続け、自分のために、人のために、社会のために貢献できる存在となれるよう、精いっぱい夢を追いかけ、皆さんが選んだ道が「正解であった」と胸を張って言える軌跡を描いていってくれることを、心から応援しています。

卒業生の皆さんの前途に、輝かしい未来が訪れることを願い、混沌とした先行き不透明な時代だからこそ、力を発揮できる時のためのエネルギーを蓄え、たくましく生きていかれることを祈念申し上げ、式辞といたします。

令和3年3月3日

須坂東高等学校長 鳥谷越 浩子